陸軍歷史

一七

勝
2
17

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

陸軍歴史巻十七

沿海警備五

目録

一　土佐ノ漂民萬次郎米國ヨリ還ル
一　阿部伊勢守江川太郎左衛門ニ與ル書牘
一　水戸老侯ノ書牘
一　魯人應接ノ上申

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一　長崎港警備ノ砲數

一　藥師寺久左衛門預リ之砲數

一　佐賀侯警衛之砲數

一　文化年間長崎ノ變

一　東西蝦夷地ノ上知

一　北地移民之布令

一　從前官吏北境ノ巡視

一　魯國使船始末

一　丁卯北地ノ亂

一　林子平海防ノ論

一　高橋作左衛門海防ノ意見ノ建議

一　京攝近海ノ警備

一　三事之詔令

一　神戸外四ヶ所砲臺守備ノ經畫

一　海岸警備ノ布令

一　攝河泉播兵賦取立之意見書

一　大坂町奉行ノ内狀

一　驛路警備ノ議

一　隱秘之害

海州書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

沿海警備五

嘉永六年癸丑十一月松平土佐守領分土佐國幡多郡宇浦湊父萬次郎被召出普請役被申付並之通宛行被下

右萬次郎儀天保十二年正月十六歳の時傳蔵丑右

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

衛門重助寅右衛門一同都合五人乗船致漁猟
ニ出孜霧海上ニ而難風ニ逢無人島ニ漂着六
七日之内艱難甘一雲アメリカ人ニ助られ北
アメリカ國ニ到着夫より十ヶ年之間アメリ
カ國ニ住居既ニアイチセルと云者の聟養子
ニ相成天文學并彼國通用の横文字等稽古致
孜霧歸朝之志願天地ニ相通し孜哉不計便船
を求め彼國を出帆し嘉永四亥年正月琉球國
ニ着同年七月薩摩國ニ着同七月十八日肥前
長崎へ着同十月朔日ゟ同所於奉行所吟味有
之繪踏等致し其後入牢翌子年六月於同所白
洲書付讀渡白銀并錦入衣下帯手拭傘被下且
萬次郎所持之品ニ左之通

一砂金銀　一挺
一測量之器　一挺
一横文字書籍　二挺
一火打仕掛鉄砲　一挺
一懐中鉄砲并玉薬等　二挺

十二冊

安政元年甲寅春米利堅使節ペルリ再ニ江

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

戸近海ニ来リ五市ヲ許スコトヲ幕府ニ通ル
ニ付正月廿三日亜米利加船万一江戸近乗
入候モ難計ニ付其方儀早速出船イタシ精
一ハイ申諭為乗戻候様可致ト江川太郎左
衛門ヨリ執政阿部勢州ヨリ書取ヲ以被申渡
候

此ノ時ニ當リ應接通弁ノ為メ中濱萬次郎
数年米國ニ漂流滞在致居候故英語ニ通シ
居候（當時蘭書ヲ讀候者ハ有之候得共英語
ニ通スル者ハ至テ稀ナリ）ヲ召シ連レ出張致度ト存候
處當路ニ嫌疑者多ク且水戸烈公モ御意見

海舟書屋

ヲ異ニシ阿部勢州水戸烈公ト往復ノ文ア
リ其文ニ云

江川太郎左衛門ヨリ　伊勢守

過刻者内来駕其節縷々万次郎儀ニ付被申
聞候趣内手前出船乗戻方申諭候ニ付通弁
致シ候者無之テハ甚差支無據儀ニ付万次
郎儀者當時心底モ可見届更ニ懸念無之候
ニ付内手前引受御不為ノ儀ハ不被取計趣
故只今ニモ出張何分不可計事ニ付其通ニ
テモ可然ト存候得共尚萬ト相考候處内手

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

前ノ場ニテ万事之引受受合被申候儀御懸念イタシ候筋ハ無之万次郎儀必及間之儀ハ無之儀顕然イタシ居候得共異情更ニ難計舩中へ乗込如何様之儀ニ相成異人ヨリ万次郎儀連行候テモ致シ方無之其上右ニ付テハ水府老公同列中ニモ深懸念致被居候人ニモ有之候間格別差支モ無之候ハヽ今晩中万一應接等出舩モ有之儀ニ相成候ハヽ先ッ万次郎ハ見合セ候テハ如何有之カ左候得者明日登城ノ上一應申談早ニ沙汰可致ト存候間左様承知可給候何モ為筋ノ儀勘弁ノ上猶差支ノ儀モ有之候ハヽ明朝登城懸可被申聞候事

正月廿三日

猶ヽ端書ノ趣承知イッレ出来上リノ上ニテ申上候様可仕候以上

過刻参上仕候節縷々万次郎儀ニ付申上候趣出舩乗戻方申諭候ニモ通弁仕候モノ無之テハ甚差支無據儀ニ付万次郎儀ハ當時

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

心底モ見届更ニ懸念無之私引受候不為ノ
儀不取計趣故只今ニモ出張何分不可計事
ニ付其通ニテモ可然哉思召候得共尚萬ト
御勘考被遊候處私儀万事引請候申上
候上ハ聊懸念ノ筋ハ不被為在万次郎儀
モ又間ノ儀無之ハ顯然仕居候得共異情更
ニ難計船中ニ乗込如何様之儀相成異人共
万次郎連行候テモ致方無之其上水戸老公
御同列様方ニモ深御懸念被為在候間格別
差支モ無御坐候ハヽ今晩中万一應接等出
船モ仕候儀ニ相成候ハヽ先万次郎ハ見合
候事ハ如何可有之欤左候得者明日御登城
ノ上一應被仰談早ク御決可被成下間左
様可仕何モ御為筋ノ儀厚勘弁ノ上猶差支
ノ儀モ御坐候ハヽ明朝御登城懸可申上旨
御書取之趣承知奉畏候右御請奉申上候以
上

正月廿三日

春寒無障大悦櫻島塲礮製モ半ニ不至候内

海事書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

墨夷渡来遺憾千万何卒一挺ツヽ早ゝ出
来扨出来候ハヽ直様墨車等全備イタシ度
志願ニ候サテ中萬事決テ疑無之者ト被見
抜候カニ相察疫癘本国ヲ慕ヒ帰り候程之
者故感心ニハ候得共元来墨夷ニテ中萬カ
幼年ヲ見込右一人ノミ別テ愚ヲキセ筆算
仕込候儀ハ計策無之トモ雖申中萬モ一命
ヲ被救候上幼年ヨリ二十歳迄ノ恩義有之
候ヘハ墨夷ノ不為ニ成候事ハ決テ好ミ申
間敷仍テハタト疑無之ト被見抜候トモ

海舟書屋

彼船ニ遣候儀ハ勿論上陸ノ節モ為逢候儀
ハ必見合セ此方ノ内評議等ハ一切為知不
申方可然尤モ江川ノ用ヒ様ニテ墨夷ノ事
情等ヨク分リ却テ彼ヲ防キ候道具ニイタ
シ候ハヽ江川ノ腹ニ可有之如才ハ有之間敷
候得共過憂ノ餘リ如此候也

二月初二　登城出仕ニ指カヽリ急乱筆宜ク推読可致候　水隠士

江川トノ

二白實ハ此節カラハナシガヒニ致置候ハ
不用心ニ候ヘ共究クツニイタシ候テハ當

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

人氣受ヲソンジ用ニ立不申候間帥アテガ
ヒヲハ存分ニ被下拠江川腹心ノ者ヘ内密
被申付ハ十ヒガヒノ内ニ守護ノ意ヲフク
ミ可然龍ノ子ヲナヅケ飼置候モノ大嵐ノ
節風雲ニ乗ジ逃去候ムカシ咄ノ如ク万一
變心墨夷ノ船ヘ被連行候時ハ臍ヲカミテ
モ間ニ合不申クレクレモ念ニ念ヲ入候方
可然候
三白墨夷ハ應接ノ儀我ニ備無之故不残念
平穏ニ返ス度ハ同意ニ候ヘ共平ト穏ト二
海舟書屋

テ彼ニ被乗候ヘハ際限モ無之候彼ハ河伯
ト雷獣ノ如ク水上ト火器ヲ恃ミカクノ如
ク横行イタシ候ヘ共野原ニコロケ廻リ候
ニ至テハ河伯モ雷獣モ格別ノ事無之間艦
砲備候迚ハ我ハ神速接戦ノ氣ヲ持應接イ
タス度江川ノ勇氣必夷人ノ膽エヒバキ可
申ト存候乍序例之剛情申述候不盡

魯西亜船渡来之節應接方等ニ伐申上候
書付

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

追々浦賀奉行より申上候大島沖へ相見候異
國船ハ魯西亜船よも可有之哉之由弥渡来之
節ハ亜米利加人ハ通商差免之儀ハ速ニ魯西
亜ニも許容相成候間右を基本と以為一應
接方之儀ハ委任被成候ニ付猶勘弁之上其餘
之見込十分ニ申上候様筒井肥前守川路左衛
門尉ニ被仰渡候趣を以て同人共より差出候
取計方ハ内慮相伺候書面一覧勘考仕候儀右
着先般肥前守左衛門尉長崎表へ被差遣候節

江川太郎左衛門

淵舟書屋

ハ渡ハ坐候魯西亜ハ之ハ返翰之趣ニ而者速
ニ屈服仕間敷譬ハ両人之差働を以て一旦退帆
仕候共猶又渡来可仕者眼前と奉存候ハ渡来
仕自然彼是と差縺候期ニ臨ハ無ハ攝彼ニ願意
條件之内ハ許容相成候様ニ而者如何ニも
失體と心配仕候故穏便ニ相願社幸ひ其機會
を不失ハ英断を以て魯西亜ハ交易ハ差免
之方可然旨先頃再三愚意之次第委細申上置
候程之儀弥ニ當節渡来之亜墨利加願之趣ニ
出格之ハ所置ニ被成下候ハ肥前守左衛門

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

尉より談話之次第も有之猶更魯西亜之方へ
者別段之廉無之候而者信義を以様心得可申
哉難計左候而者国體に拘り不可然儀と右
両人に於ても彼是心配申上候趣至極尤之事
に奉存且者亜米利加抔と違ひ魯西亜之儀者
帝國より乍有之旁都而者取扱向別段被成遣頼
意條件之内より可成丈者勘弁を被為加何と之
廉と二ヶ條許容とも之儀両人より申上候通前
以て御治定之趣被仰渡其餘之事共者御委任
と不被成置候而者両人に於ても當惑可仕哉

海舟書屋

二奉存候且又通辞共之儀格別御取締無之候
而者大設を誤り候儀も出来可仕哉難計尤肥
前守左衛門尉見込より可有之候得共不容易大
切之事に付一應申上置候依之此段申上候以
上

寅三月十二日（安政元年）

長崎湊公儀御臺場

右之通御臺場一挺

一二貫目石火矢

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

一壹貫目　同　二挺
一五百目　同　二挺
太田尾沖臺場
一壹貫九百目石火矢　一挺
一壹貫目　同　一挺
一五百目　同　一挺
一百五拾目同　一挺
一五拾目　筒　一挺
一三拾目　同　一挺
女神沖臺場
一二貫目石火矢　一挺
一壹貫目　同　一挺
一二百目　同　一挺
一百五拾目同　一挺
一三拾目　筒　一挺
同所新規沖臺場
一二貫三百目石火矢　一挺
一壹貫目　同　一挺
一五百目　同　三挺
一八貫目　同　一挺

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

同所假陣備地向
一六百目　同　一挺
一二貫目　同　二挺
一壹貫目　同　二挺
同所沖向
一五百目　同　三挺
一壹貫九百目　同　一挺
一壹貫目　同　一挺
魚見岳一ノ増陣場
一五百目　同　二挺

一壹貫目　同　二挺
一壹貫五百目　同　一挺
一八百目　同　一挺
一七百目　同　一挺
一三百目　同　一挺
同所二ノ増陣場
一五百目　同　二挺
一七百五拾目　同　一挺
一八百目　同　一挺
一壹貫五百目　同　一挺

海州書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一三百目　同　二挺
一壹貫目　同　一挺
一六百目　同　一挺
一三百目　同所三ノ増西臺場　一挺
一壹貫目　同　二挺
一五百目　同　一挺
一八百目　同　一挺
一五百目　同　二挺

神崎西臺場

一二貫目　同　一挺
一壹貫目　同　一挺
一六百目　同　一挺
一二百目　同　一挺
一五拾目　筒　一挺
一三拾目　同　一挺

同所新規西臺場

一二貫四百目　同　一挺
一壹貫五百目　同　一挺
一壹貫目　同　一挺

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

同所一ノ増悟臺場

一壹貫目　同　一挺
一八百目　同　三挺

同所二ノ増悟臺場

一壹貫目　同　二挺
一壹貫五百目　同　二挺
一八百目　同　二挺
一三百目　同　一挺

同所三ノ増悟臺場

一壹貫目　同　二挺

一八百目　同　一挺
一五百目　同　一挺
一三百目　同　一挺

白崎悟臺場

一壹貫五百目　同　一挺
一壹貫目　同　一挺
一五百目　同　一挺
一百五拾目　同　一挺
一二百目　同　一挺
一五拾目筒　一挺

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

高鉾ヶ浦場

一七百目　同　一挺
一壹貫目　同　一挺
一二百目　同　一挺
一五拾目筒　一挺
一三拾目同　一挺
同所新規ヶ浦場
一壹貫目　同　二挺
一九百目　同　一挺
同所一ヶ増ヶ浦場

一壹貫五百目　同　一挺
一八百目　同　一挺
同所二ヶ増ヶ浦場
一壹貫五百目　同　二挺
一壹貫目　同　一挺
一八百目　同　三挺
一三百目　同　二挺
長刀岩ヶ浦場
一壹貫三百目　同　一挺
一四百目　同　一挺

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一五百目　同　一挺
一二百目　同　一挺
一三拾目筒　同所一ヶ増焔薹場　一挺
一八百目　同　二挺
一壹貫目　同　一挺
一二貫目　同　一挺
同所二ヶ増焔薹場
一三百目　同　一挺
一八百目　同　一挺

海舟書屋

一壹貫目　同　二挺
同所三ヶ増焔薹場
一三百目　同　一挺
一八百目　同　一挺
一壹貫五百目　同　二挺
同所四ヶ増焔薹場
一五百目　同　一挺
一八百目　同　一挺
一壹貫目　同　二挺
蔭ノ尾焔臺場

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一壹貫目　同　一挺
一六百目　同　一挺
一二百目　同　一挺
一百五拾目　同　一挺
一五拾目箇　同所新規南墓場　一挺
一壹貫目　同　二挺
一壹貫目　同　一挺
以上
合百四拾四挺

海舟書屋

内
公儀御筒百。四拾四挺
私御預御筒書付　藥師寺久左衛門
拾壹挺
覺
一鉄御石火矢
内
鉦百目玉　貳挺　長三尺六寸貳分
〔○〕

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

是ハ延寶元丑年請取

此時筒ニ相成兼申候

鉛三百四拾目玉　四挺　長六尺貳寸五分　〔ハ〕

是ハ延寶二寅年請取

此内壹挺者西時役所内時臺場時備ニ

相成無申候

〔ハ〕

鉛七百五拾目玉　壹挺　長六尺六寸六分　〔ノ〕

是ハ延寶五巳年請取

〔メ〕梅ヶ崎時臺場時備ニ相成居申候

鉛五百目玉　壹挺　長四尺七寸七分　〔ヌ〕

〔ヌ〕右同所時備ニ相成居申候

鉛四百五拾目玉　壹挺　長四尺五寸八分　〔ネ〕

〔ネ〕此時筒時備ニ相成兼申候

鉛貳百六拾目玉　壹挺　長三尺五寸三分　〔ロ〕

〔ロ〕西時役所内時臺場時備ニ相成居申候

鉛百九拾目玉　壹挺　長四尺壱寸五分　〔ヘ〕

〔ヘ〕此時筒時備ニ相成兼申候

一唐銅御石火矢　六挺

内

鉦三百目玉　壹挺　長壹尺三分

㊀ 梅ヶ崎吉墓場吉備ニ相成居申候

鉦貳百目玉　壹挺　長八寸四分

是ハ延寶二寅年先祖藥師寺宇右衛門ヨ

被仰付鑄立申候

㊁ 西吉俊所内吉墓場吉備ニ相成居申候

鉦六拾五匁玉　貳挺　長三尺貳寸三分

是ハ延寶四辰年請取

鉦百目玉　貳挺　長三尺壹寸五分

是ハ延寶八申年請取

海舟書屋

㊂ 此吉筒四挺者儀物役所新地用意ニ相

成居申候

一唐銅火矢御筒　貳挺

鉦三百目玉　長九寸貳分

㊃ 西吉俊所内吉墓場吉備ニ相成居申候

壹箱

一唐銅鑄形并藥匙

是者延寶二寅年先祖藥師寺宇右衛門ヨ被

仰付鑄立申候

右拾九挺之御筒延寶元丑年ヨ同八申年迄被

遣御預之旨被仰付追々請取申候

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一鉄炮鉄砲

内

鉛百目玉　壹挺　長壹尺九寸五分

同五拾目玉　壹挺　長貳尺四寸壹分

同三拾目玉　壹挺　長貳尺三寸八分

同貳拾目玉　壹挺　長三尺七寸四分

㊃ 鉄砲四挺共西浦役所梅ヶ崎浦臺場

浦備ニ相成居申候

右四挺之浦筒者享保六丑年被遣　御預之

旨被仰渡請取申候

四挺　㊄

一唐銅御召大矢

内

鉛四百目玉　壹挺　長五尺　㊀

㊁ 湊番所谷間新方用ニ浦渡方相成居申

候

四挺

鉛貳百五拾目玉　壹挺　長四尺貳寸　㊂

㊃ 西浦役所内浦臺場浦備ニ相成居申候

鉛貳百目玉　壹挺　長六尺壹寸　㊂

㊃ 梅ヶ崎浦臺場浦備ニ相成居申候

鉛貳百目玉　壹挺　長四尺三寸　㊃

海州書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

㊀湊書所合図新方用二依渡方ニ相成居
申候
右四挺之佛筒者寛政三亥年為手入被仰渡置
候旨被仰渡請取申候
一鉄砲
内
貳拾目筒 壹挺
拾匁筒 壹挺
六匁四分筒 壹挺
六匁筒 壹挺

六挺

㊁

三匁八分筒 壹挺
貳匁八分筒 壹挺
書面鉄砲六挺之儀者先年鉄砲ニ停止之
節ニ取上ニ相成候處寶永六丑年誓古打
㊁佛免ニ付先祖又三郎兄又次郎筒書面之
高正徳元卯年又三郎依願ニ渡相成候ニ
付手入火通ニ等仕置申候
是者正徳元卯年請取
惣合三拾三挺
内

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

鉄哨筒　拾壹挺
唐銅哨筒　拾貳挺
佛鉄砲　四挺
鉄砲　六挺

右之通ニ哨座候以上

卯十月　　藥師寺久左衛門

松平肥前守持

長崎港哨固筒配

海舟書屋

一三十六ポント　二挺　西岬
一八十ポント　二挺
一三十六ポント　四挺　中ノ田
一八十ポント　二挺　大明寺干場
一三十六ポント　三挺
一二十四ポント　二挺
一十二ポント　二挺

伊王島

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一八十　ポント　二挺　圓通蕃下

一三十六ポント　三挺

一二十四ポント　二挺

一十二　ポント　二挺

神島

一二十四ポント　二挺　嵩雲岬

一二十四ポント　二挺　同濱手

一十二　ポント　二挺

一二十四ポント　一挺　飛渡

一十二　ポント　一挺

一百五十ポント　二挺

一八十　ポント　八挺　四郎島

一三十六ポント　二挺

一十二　ポント　二挺

鑿崎諫早家來受持

一八十　ポント　三挺

一三十六ポント　三挺

兩島合テ五十六挺

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一艀載四貫弐百目　拾挺　香焼詰　五十人受持
一手銃弐百挺　両島ニ百挺ツヽ
但艀載入テ
御筒惣計六十六挺
御筒掛七百三十四人
外白帆注進之時ゝ駈付弾薬運大砲運転
手助土兵百十六人内　神嶋　六十四人
伊王島　五十弐人
内
指揮役　四十四人
打手役　百人

同手明籏　百人
但小筒掛入テ
同足軽弐百九十人
一百五十ポント　一挺
一八十ポント　一挺
一三十六ポント　一挺
但指揮役者外惣筒二挺ツヽ一人ツヽ
右掛り一挺ニ付十人ツヽ
一二十四ポント　一挺
一十二ポント　一挺

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

但右同断

右掛り一挺七人ツヽ

小割

侍　四人
手明鎗四人
足軽　二人

同

侍　三人
手明鎗三人
足軽　壱人

用意弾薬

一百五十ポント　一挺ニ付　但ボム弾　弾薬二百発ツヽ、

一八十ポント　同　但同　同四百発ツヽ、

一三十六ポント　同　但同　同四百発ツヽ、

一二十四ポント　同　但ガラナート　同四百発ツヽ、

一十二ポント　同　但ドロイフ　同三百発ツヽ、

一船載四貫弐百目　同　但ガラナート　同二百発ツヽ、

一手銃八文　同　但鉛九　同三百発ツヽ、

一大小鉄弾　二万千百個

一八文玉　三十万個

一火薬　拾三万千四百斤

汲古書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

長崎港ノ警衛ハ寛永十七年ヨリ長崎筑前
志佐賀ノ両家ニ命セラレタルカ何レモ其封
土ニ寂遥スルヲ以テ衛戍ノ便ナルカ故警
備殊ニ行届キ就中當時佐賀族ハ材識卓絶
風ニ海防ノ事ニ注意シ領内ニ反射爐ヲ築
キ多ク銃砲ヲ鋳造シ又其臣下ニ命シ和蘭
人ニ就キ海軍ノ事ヲ傳習セシム當時ノ藩
侯中ニ在テハ頗ル錚々ノ名アリ殊ニ長崎
港警衛ノ事ニ付テハ資財ヲ愛マス最其力
ヲ盡サレタリ前年英人ノ變アリシ以来其

海舟書屋

藩士モ一層敵愾ノ心ヲ発シ坐薪枕戈晝夜
防備ヲ懈ラス誓テ報効スル所アラントヲ謀
ルト云

先是文化五年戊辰八月十五日英吉利軍艦突
然長崎港ニ入和蘭人二名ヲ捕ヘ以テ質トナ
シ薪水ヲ浮テ忽チ去ル時ニ港内不意ニ出狼
狽驚擾甚シ長崎奉行松平図書頭康英其防備
ノ足ラスシテ外國ノ侮慢ヲ受ケ國威ヲ辱
シムルト云フヲ以テ割腹シテ其指揮ノ失図

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

ヲ謝ス

右英舩ハ十七日夜ニ至テ出帆ス長崎奉行松平岡書頭十八日朝迄ニ異國舩出帆之御用向取調相濟惣体ノ始末言上并帆影見隠之注進其外御届迄仕廻候テ大早宿次被差立候以後御用ノ間ヘ被入隠密ノ御用迄自筆ニ被相認候ト申事ニテ陣服ニテ有之何歟輕ク認物被致候故近習小性人ハ詰所ニ差扣候儀餘リ永キ認物故襖ヲ明ケ伺候處打伏被居候ヲ引起候ヘハ切腹被致最早絶命ニテ療治モ間ニ合不申然レトモ表向ハ病氣ノ筋ニテ設ク重リ候趣夫ヽヘ達事等モ相濟病死被露廿七日葵送有之尤切腹ニテ法斬被申上候伐大意之趣一旗合ノ節紅毛人兩人奪被取候ヲ其儘渡シ置檢使ノ者一旦御役所ヘ引取候甚柔弱ノ取扱仕候儀日本ノ恥辱ニ相成畢竟家来ノ聽病ト八申内主人常ヽ申付様不行届今更公儀ノ御威光ヲ穢候段申譯無之一ヶ条

一十五日ノ夜端舟ニテ異國人湊内ヘ乗入候伐ハ案外ニテ尤陸手ノ備ノヽ頓著致シ沖ヨリ

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

理不盡ニ右様ノ仕業可有之候ニ付心付不申候肥
前両御番所ニテ万一右等ノ儀有之候ハヽ防
留可申儀別段差図モ不相加候段油断ノ至ニ
ケ条
一十五日ハ晴夜ニテ右異国人端舟三艘両御番
所嚴通リ候儀内實ハ肥前ノ番衆見分致居候
ヘトモ畢竟詰人ノ人数少ク候間遮リ候事モ
不相調候故見流シ置候儀在候儀ハ全ク當年ハ最
早紅毛舩不參候ト心得内ニテ國許ヘ引取
リ両御番所ニテ人数漸ク百四五十人モ相詰
候仕合故所詮三艘ノ異人ヲ防留候事不相成
候故態ト見遁シ候段跡ニテ相顯ハレ御番所
ノ儀無ニ帝定法ノ人数モ有之儀右体ハ鍋島
家ノ不將ト申内為奉行内ニ見聞ニ役人ヲモ
付置内乱等モ可致之儀無其儀ニ番所ノ空虚
ニ及候儀ハ肥前ノ不調法トハ乍申第一奉行
タル者不行届故肝要ノ圀ヲハヅシ候段今更
不念之至ナリ果三ケ条
一異國人ヨリ法外ノ横文字差出不届至極ニ付
焼討ノ手當肥前筑後ヘ申渡候儀人数到着無

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

之故不及是非紅毛人ヨリヲタヤカナル取計
ヲ任相頼無擾薪水米野菜等相与ヘ紅毛人ヨ
リモ牛二疋并豕等相贈候ヨシ彼方ヨリ焼討
ニ不仕候様取鎮候儀ハ畢竟人數不足故和平
取扱仕候段不調法無擾次第ニ候是四ヶ条
一大村上総介儀今二時計リモ早ク到著仕候ハ
申談候テ役所ノ人數并地下役人共又ハ諫早
播磨人數等ヲ取合候ハヽ焼討モ可仕候雲肥前
ノ人數間ニ合不申且上総介到著遅参候テハ
無擾候ヘトモ程延候内異國船出帆仕候儀殊
海舟書屋

念至極ニ奉存候依之向後長崎奉行之儀ハ兎
角大身之者被　仰付度候右五ヶ条不調法ノ
取扱浅智ニテ万端不行届儀トモ今更後悔ニ
及候ヘ共一身ノ恥辱ハ差置此場ニ至候テ天
下ノ御恥辱ヲ異國ヘ顕候条不調法ノ仕合ニ
候段ハ披露給リ度候
八月十八日　松平肥前守
松平肥前守儀當秋諳厄利亜船長崎渡来ノ節
湊内ヘ端舩乗入当番所前注返致セシ時家来
共取鎮方不行届万事油断之形勢其上當番之

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

處人数手當モ踈之様子不束之至依為不調法
通塞被仰付
右於牧野備前守宅名代鷦島甲斐守ヘ申渡
安政二年乙卯二月

松前伊豆守

此度御用ニ付東西蝦夷地西在乙部村東在木
古内村迄嶋〻共一圓上知被
仰付候替地之
儀者追而可被下猶吟味手當等之儀ハ市沙汰可
有之候

同年十二月右為替
地陸奥国伊達郡之
内高三万石之高一万六百五十八石餘共被下
置為吟味手當年〻金蔵ニ而金一万八千両宛
被下
之

松平陸奥守

右老中列坐備前守申渡之

此度東西蝦夷地東乙部村木古内村島〻共一
圓上知被
仰付候間諸事可被申合候
且津軽越中守南部美濃守ハ蝦夷地之警衛被
仰付候ニ付其方蝦夷地之警衛被
仰付候佐竹
右京大夫ハ被
仰付候ニ付其方ハ無而被
仰付
置候条猶又可被申合候箱館表松前地警衛ハ
可被相心得候

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

同年十月伊勢守布達

五百石以下　御目見以上以下同惣領次三男
厄介
清水附之者　浪人　百姓　町人

右者今般蝦夷地一体上知被　仰出候ニ付而
旗本諸家人之内風寒暑湿を不厭山野を跋渉
筋骨を固め文武之修練心懸有者共相願有浮
者元身分ニ應ー在任被　仰付候間名前早々
取調可申聞候且万石以上以下之家来主人見
込之者も有之候ハヽ申立次第是又可被差遣

海舟書屋

候間書面之者共何れも荒地開墾野馬牛牧養
を始として食料薬用ニ可充生類育方金銀銅
鉄鉛山間歩巨材薪柴伐出草木類植付石炭塩
取器具製作採薬鯨猟何ニ不依生産ニ相成候
類并湊附等之場所ニ休泊所茶店取建度存者
ハ任望被差遣尤其品ニ應ー時宜ニよる可被
下候猶又　御国益ニも相成格別出精之慮
顕れ候者ハ萬一事實相乱士人者身分ニ取立
農工商之輩者地所家宅米穀相渡其上ニ賞賜ニ
手當等も有之候条右之趣相心得有志之者ハ

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

其筋迄可願出候猶委細之儀者箱館奉行可承
合候

右之通被　仰出候間末々迄不洩様可被相觸
候

始メ寛政五年癸丑九月吹上ニ於テ魯西亞
國ニ漂流數年ニシテ歸國セシ伊勢ノ水主
磯吉幸太夫ナル者ヲ召シテ親ク外國ノ情
實ヲ訊ヒ侍醫桂川甫周ニ命シテ是ヲ筆記
セシメ名ツケテ漂民御覽記ト云此磯吉幸

海舟書屋

太夫ナル者ハ勢州白子ノ船頭ナリ天明二
年十二月駿州沖ニテ難風ニ逢ヒ魯西亞ニ
漂着滯留十二年今年九月三日蝦夷ノ子モ
ロノ地ニ送歸サレ并ニ通信通商ノ事ヲ乞
フ此ニ因テ目付石川左近將監忠房村上大
學義禮兩人ヲ諭詔使トナシ松前ニ遣ハサ
レ此地ニテハ望ミヲ事取上カタシ若願事
アラハ長崎ニ到ルヘシトテ信牌ヲ與ヘラ
レ彼國ノ船ハ本國ニ歸リ又其諭書ニ曰
國書持來ル事アリトモ魚テ通信ナキ國ハ

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

國王ノ稱呼モ分リカタク其國ノ言語モ文
字モ名分貴賤ノ差等モワカリカタケレハ
自カラ其禮ノタヽシキ所ヲ得カタシ我國
ニテハ敬シタル事モ其國ニ於テハ踈慢ニ
アタラントモ測ル可ラサレハ國書ノ往復ハ
ユルシカタキヲ以テ今度漂流ノ人ヲ送リ來
ルヲ拒ミテサイフニ非ス此地ヨリ通信ノ
許シカタキヲ以テナリ

享和元年（寛政十三年二月改元）二月小納戸戸川藤十
郎安倫大河内善十郎政長ニ命シ松前地方

海舟書屋

ヲ巡視セシム

同二年二月羽太庄左衛門戸川筑前守始テ
蝦夷地奉行ヲ命セラル（同二年蝦夷地奉行
ヲ箱館奉行ト改メ
ラル）

寛政十年戊午五月目付渡邊久藏大河内善
兵衛勘定吟味役三橋藤右衛門等ヲシテ蝦
夷地ヲ巡察セシム是蝦夷ノ邊境ヲ開カル
ルノ始ナリ

文化元年甲子（享和三年改元距寛政五年十一年）九月魯西亜
船一艘肥前長崎港ニ來ル國王ノ使節レサ

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

ノツト國書及方物數品ヲ携ヘ奉行ノ指揮
ヲ待テ江府ニ至リ將軍家ニ拜謁シ本國
ノ地懸隔タリト雖モ我カ屬國貴國ニ隣ル
依テ通信通商ヲ請ハンカ為且ハ先年松前
ニテ賜ハリシ信牌ノ謝ヲ述就テハ貴國ノ
漂民四人ヲ送来ルノ由ヲ告ケ信牌ヲ出シ
テ相違ナキヲ示ス長崎奉行肥田豊後守頼
常急キ此由ヲ申セシカハ日付遠山金四郎
景晋ヲ下サレ通信通商ハ素ヨリ許シ難ク
諭書ノ趣ヲ申聞カセ帰帆セシムヘシトテ

海舟書屋

翌二年三月魯西亜ノ使節レサノツトヲ官
舎ニ召シ奉行目付素袍長袴ニテ出席頼常
諭書ノ旨ヲ述テ云先年松前ニ来レル節ス
ヘテ通信通商ハ許シカタキ事ヲモ一通リ
申諭シ國書ヲモ持来ルマシキ旨ヲモ申シ
ス松前ノ地ハ官府ニ申ス處ニ非ス若此上
其本國ニ至リシ漂流人ヲ連来ルカ又願申
ス旨アラハ長崎ハ異國ノ事ニ預ル地ナレ
ハ議スル事モアルヘシトテ長崎ニ至ル為
ノ信牌ヲ與ヘシトナリ然ルヲ今又國主ノ書

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

ヲ持来ル事ハ松前ニ於テ申シ諭シタル旨
弁シ雖キニヤ有ン是偏ニ域ヲ異ニシ風土
ノ等シカラヌ故ニ通シカタキ事シカリ其
事再三ニ及テ我國ニ深ク望ム所アルハ其
切ナルヲ知レリ然レ𪜈其風土異ニシテ事
情ニ於ケルモ又懽心ヲ結フニ足ラス徒ニ
万里ノ波濤ヲ煩サン故ニ以テ絶テ通セス
是我國歴世封疆ヲ守ルノ常法ナリ交易ノ
如キハ互ニ利有ルカ如シト雖モ終ニハ我
國有用ノ貨ヲ失ハン是國計ノ善ナル所ニ

海舟書屋

アラス是ヲ以テ國初厳禁ヲ設テ唐山朝鮮
紅毛ノ外ハ我國ニ来ル事ヲ許サス今ニ於
テ然リ是ニ依テ今船中薪水ノ数ヲ與ル間
速ニ地方ヲ放レ帰帆シテ再ヒ来ルヿ勿レ
ト上諭ノ旨ヲ申渡スレサノツト服従シテ
席ヲ退キ日アラスシテ長崎ヲ発シ本國ニ
帰帆セシト

同四年三月松前呂狭守重廣國政不行届依
テ松前領并西蝦夷地一圓被召上常陸上野
陸奥ノ内九千石ヲ賜フ

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

同年四月十三日箱館ヨリ三百里程北ノ方
東奥蝦夷地エトロフ島ノ内ナイホト申所
ヘ魯西亜船二艘来著上陸致シ番人等ヲ掠
捕番屋蔵ヲ焼拂同廿九日同島ノ内箱館奉
行支配向ノ者罷在候會所シヤナト申處右
船二艘差寄上陸イタシ大筒等ヲ打掛候ニ
付勤番ノ者共相防キ五六人程打殺シ深手
為負候モ有之處夜ニ入浦手ヘ相廻リ火ヲ
掛焼拂候ニ付防禦一同シヤナヨリ引退キ候
由箱館奉行ヨリ注進ス

海州書屋

同年六月参政堀田攝津守正敦ニ命シ蝦夷
地ヲ巡撫セシム大目付中川飛騨守忠英目
付遠山金四郎小管猪右衛門随行ス
同八年五月リーシリノ内泊ノ崎イトノセンコ
タントヲ所ヘ魯西亜船一艘乗組六十餘人
酋長ヲイリコルト、云船長ヲコセ、ウエンモ
ールト云此船ヲ名ツケテシヤナ船ト云先
年来リシ人ニ非ス漂流ノ体ニテ著岸シ八
人上陸シテ薪水ヲ乞フ然レ氏言語不通且
魯西亜人ト見ルナラハ有無ヲ論セス打拂

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

フ可シトノ意ニテ下知ニ寄リ南部ノ守衛
火砲ヲ放チ八人ヲ生捕魯西亜船モ初ノ程
ハ少々砲ヲ発セシカ強テ戦ヲ好マス帆ヲ
曳テ属國カミシャーツ乃ニ帰ル其虜八人ハ直
ニ松前ヘ送レリ
同十年五月シヤナ船センヘコタンヘ来テ
去年連レ行キタル播州兵庫ノ船頭高田屋
嘉兵衛ナル者ヲ上陸セシメテ云先年カラ
フトヲトロフ等ノ嶋々ヲ乱妨セシ事素ヨ
リ魯西亜王ノ知ル所ニ非ス皆カミシャー

海州書屋

ツカ等ノ属國ニ住ル無頼ノ徒ノ所為ナリ
依テ彼等ヲ罪ニ處シ自今以後貴國ノ地ニ
足ヲ入ルベカラス願ハクハ虜八人ヲ返シ
給ハル可シ此事申サンカ為一昨年ノ五月
此地ニ参リシ處計ラサリキ嚴重ノ沙アシ
ラヒニ逢テ船ヲ返シ去年高田屋嘉兵衛
ヲ遣テ漸クニ我國ノ事情ヲ通スト依テセ
ンヘコタンヨリ急キ松前ニ告テ此時ノ奉
行服部伊賀守檄ヲ飛シテ江府ニ注進セシ
カハ江府ヨリ吟味役高橋三平柑本兵五郎

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

ヲ下シテ之ヲ處理セシム於是酋長及船司ヲ松前ノ官舍ニ召シ彼カ謝狀ヲ取リ虜八人ヲ返シ事全ク治平ニ歸スト云

前數年仙臺ノ士林子平ナル者海國兵談ヲ著ハシ北虜ノ事ヲ論ス其大意ニ云

西北諸蕃概ネ地ヲ奪ヒ疆ヲ拓クヲ以テ務メトナシ威力日ニ強クシテ必將ニ我國ニ染頗セントス而シテ彼レ航海ニ長シ洪波大濤モコレヲ視ル丁坦途ノ如シ我カ國四方皆海近ク日本橋ヨリ俄羅斯阿蘭陀ニ至ル近一水路ニシテ阻隔アルヿナシ彼レ來ラント欲セハ即チ來ル可シ而シテ我レ手ヲ拱シテ備ナケレハ点已ニ危シ必スヤ國用ヲ節シ兵備ヲ脩メ瀕海ノ要地ニ砲臺ヲ設ケハ數年ニシテ沿海皆壘儼然トシテ一大長城トナラン然ル後一旦變アレハ逸ヲ以テ勞ヲ待タハ庶クハ患ナカルベシ而シテ尤モ慮ルヘキ者ハ我カ南北ノ諸島ニシテ若シ委テ顧ミサレハ彼レ或ハコレニ據ラン是レ異日ノ大患ナリト子平沒後果シ

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

テ丁卯ノ變アリ高山彦九郎書ヲ閣老ニ獻
シテ曰宜シク子平ノ墓ヲ祀リ孝ク其靈ニ
謝スベシト同時平山行蔵（名ハ潜字ハ子龍）モ亦屢
上書シテ深ク北虜ノ變スヘキヲ論セリト
云

近年英吉利漁船度々東海ニ渡来仕候ニ
付愚意申上候書付

文　方
書物奉行兼帯

高橋作左衛門

海舟書屋

近年英吉利漁船度々東海ニ罷越候哉ニ
寅年午年浦賀ニ入津當年常州大津濱ニ入
津上陸ス者演說并去年常州漁船ニ送リ被
横文字書面等心見ニ被滞皆鯨漁ス船ニ候
坐被元来東蝦夷地ニまて鯨ヲ取ニ被ハ毎年三
四月の間まて其比鯨數敷南海より集リ鯨
も多く鯨ヲ追来リ被由左候得者夏中陸奥
常陸之沖合ヲ鯨數注来仕被ヲ近来ニ
リスの漁船まて風ト見出し夫より年々東
海ニ鯨漁ヲ罷越多利ヲ得候事ヲ彼國之漁

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

夫共遥ゝ洞傳へ扨て年ゝ漁船相増来扨候
ゝ奉存候
夷人共本國を出扨て数十ヶ月洋中ゟ罷在
食物ハ野菜物之塩数魚肉計り多く相用ひを
踏み不申潮の氣にのみ色ま〻居扨故皆腫
れ病を受扨間當國地方へ来着仕扨者皆其
藥用の野菜を乞扨為みて早賤の漁人共ゟ
扨ハ當國へ對し禍心を含扨候い決て有
之間敷奉存扨乍併既ニ是迄同國の漁船三
ヶ度着岸仕其節之ゟ乞ニ任せて望之品ゝを

海舟書屋

被遣扨此度ハ不慮内ゟて来扨事故免し帰
し扨得共已来ハ決て参る間敷旨都度ゝゝ
ゟ諭書相渡扨得共愚蒙の夷人共却て是
を甘し扨て此度幾度も懇ゝの地方へ参り
野菜物等望み可申畢竟是迄の法仕法ニ而
者譲ゟ云飯の上の蝿を逐とやらんゟも可
有候坐哉其上我國へ船を寄せ間敷事を帰
國の上其筋并其外ゟも急度相傳ふへしと
の御諭も候坐扨得共彼ゟ廣き事故譬へハ
日本澳東の澳師共夷國の諭を四國九州之

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

漁人共へ可傳授答も有ら坐間數然れ
も行屆間數奉存候假令我地方へ寄間數と
申儀を堅く相守候共沖合へ鯨漁ニ參り候
儀ハ相止不申候より野菜ニ乏數候得者沖
まて我國の漁人を誑し有合之貨物を與へ
野菜物採湊より取寄候事も難計候英國之
品いさゝたる物ニも無之候て賤數者ニ
ハ格別珠數存却て喜ひ内密ニ交易採可仕
哉又英人等ハ永久年ゝ此海上ニ參り漁魚
致し候事故野菜採必用之事ニ候得ハ我國

海舟書屋

の漁人ニ親み度存候處より自然彼國の教
法を勸誘仕候儀も難計候既ニ去未年松平
右京大夫領分之漁船へ英國船より教法の
書一冊投込同年松平陸奥守領分漁船へ教
法の書一冊投込又候當五月ニも同所漁船
へ投込候事ニ有之候然れハ弥其意有之候
様ニ候坐候左候得者禍之基ニて一大事ニ
候坐候凡て珠奇を好み候ハ普通の人情ニ
て彼より誘ひ不申候共此方より慕ひ候様
之事故油斷難相成候既ニ此度英人處置ニ

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

附居世話仕候大津濱漁人共夷人差戻候節
如何よも名残惜き体に有之由先年松前へ
轉く被指置候魯西亜人帰国に相成候節
も兼て懇意に仕候者共何れも別を惜み中
には落涙に及候者も有之由承及候は人
情の難止儀とは乍申活物の夷人へ對し
左い有間敷儀に候坐候處全く珍奇を好候
處より起り候事と奉存候

夷船渡来の度に諸家警固に人数多く差出
候儀夷人へ對し嚴重に相見候手厚き儀に
者候得共僅の漁船警固に數十卒を出し
幕を張弓銃兵仗を備へ浦賀に而者只一艘
之夷船を數十艘に幾重とも取圍み候様
實に割鶏に用牛刀候より尚甚しく如何
とも夷船を恐れ候様に相見夷國人共の存
る處も却て嘲りを招き候儀と奉存候其
上失墜多く相懸り新旧諸家の困究に相成候
為筋とも不相成実に無益の費に而坐候既
に此度も水戸殿を始め中山備前守井井上
河内守等人数數萬數差出嚴重之警固有之由

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

實ハ夷船之程ハ相知レ孜得共古役人ヲレ
被差遣孜故半ハ
公儀ヘ對シ手厚ニ備孜事ル可有之哉ト被
察孜旁以無益之費ニ農時ヲ失ヒ家業ヲ休
姓并漁人共賦役ニ出豊孜且又其近邊百
み幾何之歎キニ古坐孜率右之次第ニ古坐
孜間何レも古手當無之孜而ハ相成間敷
奉存孜依之古備之儀愚案左ニ申上孜
尼て歐羅巴之法ハ海邊處ニハ大筒臺
場を備ヘ有之其國通商注來之國ニ相定め

海舟書屋

居其國ニの舩近寄孜ヘハ互ニ合圖の幟合
せ仕孜て湊ニ入孜其時通信不仕國の舩地
方近く相見孜ヘハ其最寄ニ臺場より玉込
無之空筒を放シ孜來舩之者是を見孜て舩
を寄せ間數處なるを知り孜ハ其處を去
孜事通例ニ古坐孜依之奥州南部地より東
海岸常陸下總上總安房迄之間遠淺ニて舩
著岸難成場所を相除キ舩寄せ易キ處ヘ臺
場を築キ玉目一貫目位の大筒二三挺ツヽ
相備無て古代官領の地頭より其處之名主

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

長百姓共ニ合薬を渡置夷船見掛次第玉込
不仕三発計り放候ハヽ決て近寄間敷候又
先年両度浦賀へ渡来之夷人共之申口ニハ
江戸を指て嚴越駿河之交易ニ而ハ致し薪水
野菜をも乞可申為ニ嚴越候由是ハ歐羅巴
之万國國ゟ本邦安房相模之海岸より江戸
入海之儀ニ惣稱して江戸湾と記し有之江
戸ハ本邦大都會之儀と万國一統能存居候
事故不案内ニ而當地を指乗込候趣ニ而坐
候既ニ一昨年午年渡来之節名く浦賀沖を

海舟書屋

走り過き可申儀幸ニして浦賀奉行支配向
之者乗組候由自然此後大南風ニなて帆を十
分ニ揚け走通り候歟或ハ荒中抔乗通ニ而
當地近く乗入候ハヽ無是非浦賀奉行之乙
度ニ相成候外無御坐候間浦賀近邊迄ハ乗
入不申様仕度儀ニ而坐候依之安房國ハ東
海邊より南西へ折廻大房崎或ハ金谷村邊
迄相模國ハ浦賀觀音崎より三崎迄ニ地
方を擇み臺場ニ取建有之夷船見掛次第打
拂候様被仰付候ハヽ可然奉存候

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

但臺場築方之儀者吉雄忠次郎之所持之
蠻書ニ砲術之儀精ク取綴り有之書有之和
解差上可申と存て此節和解仕居有間自然
本文之趣法用達み候相成有之ハヽ其蠻書
抜可奉入御覽有之候然実用ニハ臺場ハ低
き方宜敷由ニ有之候へ共可相成ハ石垣ニて
高く築き沖より目立有様仕有之ハヽ打拂
ニ不及立去り可申有之去新規石垣を高
く築き有之者ハ手重ニて評議み候難被
及筋ニ有之ハヽ浦ゝ自然臺場ニ可相用地

海舟書屋

形之場所ハ可有之有間其場所を擇ひ少ゝ
ハ手入ハ坐有之ハヽ手軽ニ出来可仕有
右申上有東海岸之國ゝみハ不限惣て日本
海岸之領主ハヽ被仰渡地形を擇み大筒臺
場を設け夷船見掛次第打拂有様被仰渡可
然奉存有尤右之通ハ備ハ坐有てハ海邊ハ
時候ニより霧深く咫尺ハ難見分節有之或
ハ風雨夜陰ニ乗し風と著岸可仕候ハ難計
有間其節者左之諭書相渡有様ニ而阿蘭陀
英吉利魯西亞等の文綴り海邊之ハ代官領

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

主地頭へ告渡し置候坐敷方と奉存候旨諭
書之意ハ
異國之船日本の海濱へ近寄候ものハ打
拂ふへき我國の掟を知らずして来りし
ならハ速ニ歸帆をつゝし
去ル午年浦賀へ罷越候當年常陸へ上陸
仕候ハ船中病人有之候間藥用之品求め度
主意ニ候坐候然ル處一体病人故と申候へ
ハ御仁慈之筋ニて夫ニハ打拂候事
ハ不仁之様ニハ候得共第二ヶ条ニハ申上

海舟書屋

候通数十ヶ月洋中ニ罷在上ニハ不踏魚肉
のみ食シ候ハヽ彼漁船中病人ハ常之事ニて
一艘ニ病人なきハ有之間敷候然ハ際限も
なき事ニ候坐候但見受候處実ニ難風ニ逢
候体ニて帆を失ひ檣を折り或ハ舵樓を損
シ候危類之船ニ候ハヽ不得已候假令敵國の
船ニ候共是等ハ速ニ御仁徳を以御救被遣候て
御返ニ之節此度ニ乗船ニ而渡シ相成候通
以来我國の地方へ船を寄せ候間數旨の御諭
書相渡シ候ハヽ究迫之船ニ候間実ニ御仁

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

徳ニ敬服仕リ其徒ヨリ申傳候諭之趣ヲ相
守可申奉存候
唐阿蘭陀ハ前ヨリ長崎ヘ来船通商御免
之國ニ候ヘハ此二國之船ハ見分ケ易ク阿蘭陀之儀ハ
拂不申尤唐船ハ見分ケ難船ニ無之候而ハ長崎
數儀ハ心得居候間難船ニ無之候而ハ長崎
之外ヘハ決テ不參候又其餘他邦之船日本
の地方ヘ寄可申為メニ阿蘭陀之幟ヲ立テ
可參賊船ヲ雜計ルとの掛念ヲ佐坐候浮苦
者今更之儀ニハ無之候
亜細亜洲ヨリ英吉利出張と唱ヘ大商館有
之候ハ榜瓦剌カルクツトヨリ佐坐候ハ印
度諸邦産物交易之大五市場ニて就中英吉
利之商館盛大ニ有之本國より船を出シ候
節ハ必此處ヘ立寄候て稍本國と同樣ニ心
得居且本國よりハゼ子ラルと申重き官人交
代ニて參り居都て本國の海舶を掌り候由
此處ニ阿蘭陀の商館ヲ有之日本ヘ持渡候

淪州書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

羅紗之類交易仕度由既ニ去ル寅年浦賀へ
渡来之英吉利船ニカルクウト仕出ス由申
候仍而阿蘭陀人ヘ被仰渡カルクウトヘ嚴
越度節英吉利の重き官人ヘ申渡日本近海
へ漁船不參様英吉利國申漁人共ヘ急度申
諭度様為取計度ハヽ行届可申度阿蘭陀人
より英吉利ヘ示シ度箇条
日本國より囑托之事
近来英吉利之濱船年ニ多く日本の東海岸
地方ヘ近く寄来り鯨漁をなし度く地方ヘ

海舟書屋

ニ乗寄せ薪水野菜之類をもとめ其度ニ聊
望の品を贈ヘ日本の掟まて常ニ乗らさる
他邦の船を寄る事嚴禁なれハ重て来らい
其儘ニハ返ス間敷由申諭し故なく返ら
めぬ此後猶諭を不用地方ニ来らい海岸を
去る事凡十里ニ過きさるハ非を諭せん打
拂ふへし日本の漁船も海岸を去る凡十里
ニ乗きれ因て十里以内へ来り魚を漁する
事有れハ是ハ日本ニ於て大なる患なれハ願
いしハ其方の漁人へ不洩様ニ嚴敷申諭堅

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

く禁止給ふつし其上よも猶来らハ必打拂
ふつし怨むへからさる
右之意を長崎奉行より甲比丹へ精々申含
且其意を書取らせ英吉利官人へ送らせ可
相成ハ英吉利官人より阿蘭陀人への報書
を取り差出し一段様仕度儀ニ候其元より
阿蘭陀人ハ日本へ通商仕度を歐羅巴諸國
へ對し榮と以爭且他邦の来船を禁度儀
故差はまり取扱可申と奉存候
右存込之段御諮詢止申上度可然哉取捨候坐

海舟書屋

度く無益之法入用相掛り諸家之困究百姓
の患大方ならさる歟仍之右不取愚意之趣申
上候以上

申七月（文政七年）

或曰此書當時閣老大久保加賀守ノ採用ス
ル所トナリ文政八年二月ニ至異國船無二
念打拂ノ令ノ由テ發スル所ナリト按スル

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

ニ書中遠浅ニて船着岸難ニ場所を相除き
舩寄せ易き處ニ其墓場を築き玉目一貫目位
の大筒二三挺ツゝ相備兼て地代官領主地
頭より其處の名主長百姓共へ合藥を被置
夷舩見掛次第玉込不仕三発計り放ち
決て近寄間敷旨云ゝ是レ猪鹿威シ鐵砲ノ
類ニテ一時彼ノ漁船ヲ退ケ我沿岸警衛無
益ノ勞費ヲ省ン為メノ策ニ過キス決シテ
外國舩ヲ打拂爭戦ヲ試ルノ意ニ非ス細ニ
行文ヲ玩味セハ了然ナラン文政打拂ノ令

海舟書屋

ハ當時如何ナル内評ナリシヤ知ラスト雖
モ世人是擧ヲ以テ無二ノ英斷トナス者ア
リ凡英斷トハ彼我ノ得失強弱ノ勢ヲ審ニ
シ卓然見ル處アリテ果斷決行疑ハサルモ
ノヲ云蒙昧無謀一時ヲ徼幸スルノ謂ニア
ラス爾来歐洲諸國戦鬪止ムナク幸ニシテ
東洋無事外人ト爭端ヲ啓クニナカリシハ
我邦ノ洪福ト云ヘシ天保年間打拂ノ令ヲ
止メタルハ稍時勢ヲ察シ固陋頑愚ノ憂ヲ
覺シタルモノニシテ却テ英斷ト謂テ可ナ

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

安政四年丁巳六月

京都表ゟ警衛之儀尚亦ゟ手厚ニ被成度旨
被　仰進候趣ヲ有之候ニ付其方儀ゟ警衛
被　仰付松平出羽守松平越中守被　仰付
候間被申合最寄ゟ彼地ゟ固之面々ゟ諸事
申談ゟ守衛筋厚ク可被心掛候依之大坂表
ゟ警衛之儀者被成御免候

松平讃岐守

海舟書屋

同文言

松平越中守

同文言

松平出羽守

同文言

藤堂和泉守

京都表ゟ警衛向之儀尚又ゟ手厚ニ被成度
旨被　仰進候趣ヲ有之候ニ付此度松平讃
岐守松平出羽守松平越中守儀増ゟ警衛被
仰付候間其方儀ゟ臨時出張之積ヲ以京都
ゟ之援兵可被心得候且亦伊勢　神宮

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

御警衛之儀ハ是迄之通相心得弥以手厚可
被申付候
大坂表海岸御警衛被　仰付諸事厳重可被
申付候持場其外委細之儀者土屋采女正ゟ
承合候様可被致候　松平相模守
ハ被　仰付候条諸事可被申合候依之品川
御殿山下御臺場御固之儀者被成　御免候
同文言
松平内蔵頭

同文言候之安房上総國御備場之儀者被成
御免候
同文言
松平土佐守

攝州兵庫表海岸御警衛被　仰付諸事厳重
可被申付候尤大坂堺表御警衛之面ゝ并土
屋采女正ゟ可被申合候依之相模國御備場
之儀被成　御免候
松平大膳大夫

泉州堺表御警衛被　仰付諸事厳重可被申
立花飛騨守

付候尤大坂兵庫之面々并土屋采女正
可被申合候依之上総國富津ヶ備場ヶ儀者
被成御免候

文久三年癸亥五月従
御所被仰進旨あり周防守下附
一浪花城者攝海咽喉之地故主将無之候而者難
相成被
思召候間可然大藩撰探有之南海警衛有之候
樣指揮可有之事

海舟書屋

一堺之津者實ニ異賊要衝之地故武備別而充実
無之候而者難相成候處当時守殊之外國
力疲弊之由被
聞召候間可然大藩交代有之事
一製鐵所之儀者當時長崎ニ一ヶ所有之候得共
攘夷ニ付而者堅艦巨礮必用之器械ニ候間於
便宜之地廣大之製鐵所新規取立ニ相成各藩
ゟ艦砲十分ニ行届候樣可相成事
右三ヶ條早々令命有之候樣
御沙汰候事

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

神戸　川崎　西ノ宮　今津　和田ヶ崎

此等ニ臺場迄ニ而出来ニ付當分防守之者我
ヶ塾中ゟ五人程ニ而雇五人扶持宛被下置銃手
者土地農兵二十人計り呂宋ニ而ニ扶持先ッ
壹人扶持迄ニ上達之者二三人扶持ッヽ被下
置度旨子六月建白せしゟ都而伺之通相心得
神戸并外四ヶ所ニ而臺場防守之儀者塾中ゟ相
撰當分ニ而雇可被仰付候間名前取調早ニ可
申聞旨申渡さゝれたり

海舟書屋

大目付
ニ
目付

覺

自國海岸其外ニ而臺場持場所ニ而警衛兼而被
仰付置候者ハ是迄之通り相心得今度相達候
海岸并口ニ而警衛之儀者總而ニ取締嚴重
ニ相心得候者勿論ニ候得共持場毎之面ニ者
屋敷近傍之ニ而守衛相心得差圖次第人數差出
候樣可被致候

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

右之趣万石以上以下之面々ゟ不洩様可被達
候事

戌八月

摂河泉播四ヶ國陸料所兵賦古取建見込書

陸軍奉行並

摂河泉播四ヶ國陸料所高凡積り

海舟書屋

一 高三拾弐万七千七百九拾六石八斗七升外

兵賦九百八拾三人 但千石ニ付三人宛

歩兵一列獅子多

人員八百八拾三人

是者四拾人一小隊ニ編成致し候得者八百人之處押伍并鼓手喇叭手其外隊備見込之積り

砲兵一座 八挺

人員百人

是者八挺壹座煩手八拾人之處隊備兵

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

弐拾人見込積り

歩兵役ゝ

一歩兵頭　壹人

一同　並　三人

是者隊附弐員之處三人被　仰付壹人者
坂地在住跡弐人者隔年交代被　仰候
積り砲術之儀者連年相開候日新之學術
二ヶ座在淀者遠路隔絶之場合ゟ年ゝ
交代不被　仰付候半而者業前者勿論事
理不相達不都合之儀も可有候哉ゟ奉

海舟書屋

存候

一差圖役頭取　拾三人

是者内壹人者隊備跡拾弐人之内弐人者
前同断年ゝ交代可被　仰付候積り

一差圖役　拾壹人

是者内壹人者隊備

一同　並　拾三人

是者内壹人前同断

一差図役下役　拾五人

是者旗役弐人改役下役弐人偶數小隊ゝ

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

半隊司令拾人豫備壹人合拾五人

一同　並　勤方共　　貳拾四人

是者右嚮導貳拾人惣嚮導四人

合貳拾四人外左嚮導押伍者兵卒中ゟ

相撰取締伍長等之名目を以右場合為相務

砲兵役ゝ　　夫ニ付凡貳拾員相減申候

一差圖役頭取　　壹人

是者江戸表砲兵隊頭取壹人ツヽ、勤番年

ゝ交代可被　仰付夫積り

海舟書屋

一差圖役　　貳人

是者内壹人前同斷壹人者地役ゟ被　仰

付夫積り

一同　並　　四人

一差圖役下役　　貳人

一同並勤方　　八人

是者砲車司令士八名彈藥器械取扱八名

合拾六名之處六名者兵卒中ゟ相撰歩

兵押伍同樣為相勤夫ニ付六名相減し申

候

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一調役　　就人

一同下役　　就人

是者隊附諸向用向取扱として江戸表ゟ
勤番ニ被仰付年ゝ交代之積り

一医雇醫師　　就人

是者大坂町醫師之内ゟ手當五人扶持も
被下置定医雇被仰付積り

大坂表ゟ取建可相成摂河泉播州ゟ料所村ゝ
ゟ差出兵賦ゟ入用筋之儀者総而ゟ代官
ニ而引請取扱ゟ外有ゟ座間敷ゟ奉存候

海舟書屋

且又歩兵隊ゟ入用一ヶ年目當高大概ゟも取
極可申上之處當時米價を始メ百物騰貴之折
柄ニも候座候間追而物價平均之時節を見斗
い篤ゟ算勘江戸表之振合ニ准し大坂ゟ代官
ゟ〆一ヶ年ゟ入用目當高取調申上候方可然
奉存候間當分之内者陸軍ゟ建真之節之見合
を以ゟ入用金者其時ゝゟ下ヶ相成候方ゟ奉
存候且亦陸軍同様隊中諸般之俗務取扱候者
無之候而者必差支可申候間當分之内立合同
様江府陸軍附調役之中人撰書面之人員一ヶ年ニ

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

而前條歩兵頭並并役ゝ同時ニ交代為致候方
江扱情實相通ㇾ陸軍規則向者勿論隊中諸取
扱向等江府ヲ一定仕諸般ㇾ都合可然ヲ奉存
候
一地役之向當主次三男厄ゟ出役ニ被　仰付
候樣仕度儀ニ付座候尤一時多人數役ゝ被
仰付候儀ニ付是迄陸軍役ゝ被　仰付候者ㇾ
被下候振合を以夫ゝ手當扶持被下候樣ニ
而者捨別之ㇾ出方ヲも相減候儀ニ付部屋住
次三男厄以等ゟ者可成丈不被　仰付多分
者當主之者出役ニ被　仰付　御目見以下者出
役扶持五人扶持三拾五石ニ付
貳百両相場　完之ㇾ手當金被
下部屋住者並之通拾人扶持次三男厄以者同
七人扶持之ㇾ手當金ニ直ㇾ被下候樣仕度儀
ニㇾ座候且又出役之向人物業前等捨別宜敷
者ハ不時之ㇾ抜抽被　仰付陸軍役ゝㇾ取人
ニ被　仰付候樣仕度儀ニㇾ座候
一歩兵両兵賦ㇾ渡ㇾ可相成大小銃并器械玉
藥渾而附屬之諸ㇾ道具者同所ㇾ鉄砲奉行ニ
而相渡ㇾ候積被仰渡候事

海州書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

一江戸表より被差遣候役〻者都而一ヶ年交代被仰付候得者江府兵校ニ而追〻ニ開相成候故技術研究業前不断演習為仕候得者往〻熟達之一助ニも永續方共相成可申奉存候

一兵賦者可相成丈次三男之中年齢十七才より三十五歳迄身材強壮之人物相撰差出候様ニも勘定奉行ニ可被仰渡候事

但身元不正之者雇人等者決而不相成萬一心得違を以胡乱之者差出候村役人者勿論当代官并請取方ニ而も可為落度事

一兵賦ニも呼之候者大坂筋鉄御門内ニも小屋歩兵頭並頭取差圖役等江戸表より勤番之節の住宅者同所内ニも取建可相成候城内ニも番方明ニも小屋ニ一時被差置候而も可然地役之被仰付候者ハ在来之儘ニ而通勤為致候ニも不都合之儀有之間敷奉存候

右之通ニ採用相成候上者役〻人撰方之儀者大坂町奉行ニも取締ニも目付申談巨細取調申上候様可仕候間其節ニ至り目付追而申上候様可仕候

見込ニも可有ニも座候ニ付

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

依之陸勘定奉行大坂町奉行同所陸取締陸目
付申談此段申上候以上

卯正月

陸軍奉行並

一 本文陸料所高之儀者聊減し〻も有之趣ニ
付人員些少減却可仕奉存候

二 本文陸入用筋之儀者甚土地生産之物品
ニ應し陸入用多寡増減〻も有之加之書面
兵隊者大坂表土着同様之儀ニ付旁陸入

海舟書屋

用筋者一般大坂陸代官ニ陸任セ之方ニ
三 奉存候且又兵隊附屬諸器械製造方等者
陸軍方同様ニ無之而者不都合ニ付支
是之為メ陸軍附調役弐人并下役弐人者
當分之内立合同様江戸表ニ陸遣し相
成候方可然奉存候

卯正月元日到来大坂町奉行松平大隅守ニ
之内状舊冬申遣候同地ニ農兵陸取建ニ付地

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

役之儀ニ付返事

寒威強候處益ゟ勇猛奉賀候扨先達而被仰下
候講武所役ゝ并業前可成出来次もの姓名書
未出来來陽早ゝ可申上候宜ゟ兼知可被下候
別紙貴答ニも申上次通調役下役并ゟ入用筋
取扱等之事者ゟ代官方至當ニ一同見込候間
宜御評決可被下候小生共組之内人撰致一差出次
時者跡ゟ役所之方ゟ用不弁次也
諸役ゝ地役之内ゟり ゟ見込之通被 仰付先
ゟ差支者有之間敷次得共小生共組者二三男

海舟書屋

尼ゟ之外者六ヶ敷ゟ存候大晦日之事ニ而何
欤俗事ニ被責別紙甚略ニ相成候段ゟ海容奉
願次書餘来陽愛度拜眉萬ゝ可申上候草ゝ
頓首

大晦日

大隅守

伊勢守様

尚折角ゟ自愛奉祈候以上

卯正月元日大坂町奉行ゟり差越同地農兵
ゟ取建之儀ニ付孫八郎ゟり之書面

益ゟ勇勝奉賀候然者溝口勢州ゟ農兵ゟ取
建之儀ニ付別紙差越内々相談之趣ニ而右書
類昨夜日向守殿ゟ廻ル一覧仕候処両
所様別段ゟ存寄も無ゟ座右件々之内調役下
役或人是者ゟ代官手附手代之内被　仰付可
然候ゟ見込且兵賦ゟ入用筋取扱之儀者ゟ代
官至當之事ゟ被仰下候ゟ見込も尤ゟ同意
ニゟ座候間可然被仰遣可被下候其外役々之
儀出役按扨等之次第を差定談ニも出来兼候
儀も可有之哉是者人撰之節得ゟ相談之事

海州書屋

ゟ存候其外得ゟ一覧仕候ゟ存候間右返書之儀者宜敷奉願度別冊返上
仕候右申上度如斯ゟ座候以上

十二月廿日

大隅守様　　孫八郎

貴下

卯正月二日差越大坂ゟ農兵ゟ取建之儀ニ
付淺野美作守ゟ之文通

過刻者尊書之處筑前方ゟ參り候受延引被
遣候書類存寄無之候何寄之節錢別航海中
相用有事ゟ鳴謝候受迄草略頓首

正月

卯正月元日到来大坂町奉行并ゟ取締ゟ目
付連名之回地農兵ゟ取建之儀ニ付内狀
一昨廿八日附之ゟ内狀昨廿九日午前到着大
隅守開封日向守孫八郎方ゟ順達ゟ別紙共何
海舟書屋

も熟覽仕候ゟ取調書ゟ内諭役下役之儀ゟ
代官手附手代共之内被
仰可然ゟ之見
込且兵賦ゟ入用筋取扱之儀者ゟ代官至當
ニ可有之ゟ奉存候諸役ゟ無勤又者出役其品
ニ寄抜切等之次第者孫八郎ゟり大隅守方ゟ
之返書ニ而ゟ兼知可被下候尤右三ヶ條之所
ゟ白紙相下ヶ置其他件ゟ少も存寄無之猶ゟ
勘定奉行ゟり前條ゟ相談可被下候則別冊返
却ゟ落掌可被下候右貴答迄草ゟ如斯ゟ座
候以上

十二月晦日

孫八郎

日向守

大隅守

伊勢守殁

尚以寒氣厚愛護專一ニ奉存候以上

右摂河泉播農兵取建ノ事着陸軍奉行並ヨリ大坂町奉行ヘ照會ノ上何レモ異議ナキヲ以テ建議ナセシカ其後歩兵頭窪田備前守佐久間近江守等右掛リヲ命セラレ上坂セシニ是ヨリ先大坂町奉行松平大隅守ハ轉官シ又竹内日向守ハ折節東歸ノ途上ニテ邂逅シ細ニ其談ヲ果サス後事ハ同役小笠原伊勢守擔任セシ處會時事孔棘其事緒ニ就クニ及ハスシテ止ミタリト云

第四驛路警備山脇次右衛門建白

宿驛之地取締ハ縣令之職掌ニ候間各見込も可有陳述候得共愚見ニハ其驛中或ハ近傍之村里ヨリ兵賦を募リ是を歩兵ニ仕立指揮

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

官ハ驛官尹方并ニ縣令屬吏并本陣等其他宿
驛村里中ヨリ於テ頭立タルヘキ者事變或ハ番
兵等之節帶刀免許有之右歩兵之押伍嚮導等
ヲ被仰付候ハヽ乱妨人盜賊等ヲ取押候程
之儀ニ者事足リ可申哉ト奉存候制賦之法者
古代ヨリ區ヽニ而日本記ヨハ凡仕丁者毎五
十戸云々令ニ者凡仕丁者毎五十戸二人云々
弐ハ六貫一疋ニて今の高六拾石之處ヨリ騎
兵一人ヲ募リ候事有之候後世者一万石馬上拾
六騎ト定められ其後又一万石拾騎ト時定ニ

海舟書屋

相成候間是又時勢ヨ隨ひ不申候而者相成ま
しく奉存候右兵賦之募リ方ハ男子三人已上
有之者ハ一人六人已上有之ものハ二人兵賦
差出豪農富商ニ而歩兵ニ差出候ヲ迷惑ヨ存
候ものハ代人差出候様被仰付可然哉ト奉
存候右之銃刀二術教授方之儀ハ溝武所ヨリ兩三
人宛在勤被仰付ニ而三驛一併ニ教授仕候ハヽ
怒くハ四五ヶ月ニ而可也ニ警衛相整可申奉
存候右ニ付費用之儀ハ驛館尹方計吏方縣令方
之内見込も可有之ヨリ奉存候左候得者縣令有變之

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

節一方之守衛よも可相成軍隊措辨可仕候
且兵員之儀ハ其驛村邑之大小貧富ニ應候得
共凡一小隊二小隊或ハ三小隊位ニ而可然哉
与奉存候宿驛之入口ニ是迄大木戸様之もの
有之候宿も陣屋ニ而ハ共已來ハ毎宿入口ニハ
閉門設置右歩兵隊并指揮官一両人相詰非常
を警メ其餘問屋之邊ニも邏卒二三人宛差置
候ハヽ宿驛靜定可仕哉と愚考仕候最寄府内
之咽喉之四驛ニ者野堡別堡或ハ砲臺等を嚴
重ニ新築し一時防戦相成候様常平守兵を置

烽火臺をも設置し速ニ應援變報之豫備相整
候儀専要ニ奉存候近来之蒸明ニ蒸氣之仕掛
ニ而書札往復以ての外ニ候ニ付右器械も陣屋ニ付
行ゝ者右を宿驛ニ陣備置被成候ハヽ急變之
節至極ニ便利ニ奉存候右器械新規神理之入
用一里ニ付洋銀貳百ホントより三百ホント
迄相掛候由ニ候陣屋又傳信機等を以遠境ニ
急變報告自由ニ相成候様仕度事ニ候陣屋
第五市中警備
三民之内商民ハ城下ニ群居仕候その故事変

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

二差臨候節別而狼狽周章乱雑遠方失ひ可申
者目前ニ而殊更可憐事ニ候坐候平常迚も殺
伐を相好候浪人或ハ酔狂人杯之為ニも屢市
中動揺歎敷候ニ付右ニ取締向之儀ニ候間愚考仕
候處是迄之木戸を厳重ニ為相守或ハ終夜町
人共群集巡視等仕候共決而ニ取締有申間敷
又市尹方の属吏著流し杯之服装ニ而折ニ両
三輩ツヽ巡視候共何等之ニ取締ニも相成ま
しく候哉ニ揣ニ場合ニハいつ迄も至り無可
申ニ奉存候去ル譯者武威を以悪行を相働候
者ニ対し候ニ而ハ迚も其威ニ恐れ候ニ而ハ
ニの共ニ迚も手向ひ仕候程之武力ハ有之間
敷然りとて此儘ニ被成置候而者
公邊之御威光ニも拘り保民之道ニも不被為
協候間右様之乱妨人を手易く取押へ候威力
を御授け可被成事ニ奉存候其威力ニ申者御
府内市中より高兵を御募り呼くニ而ハ創
業有之度奉存候右ニ御處置相整候ハヽ狼藉者
盗賊等之ニ取締ハ勿論事変之節も一方防禦
可相成程ニ軍卒迅速ニ措辨可仕ニ奉存候右
制賊之仕法者市尹方之ニ見込ニも可有ニ坐候

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

浮共前条申上候宿驛兵賦之法に准し可然奉
存候右拾金雜用ハ御目鏡を以豪商共に報國
之為差上候様被仰付候ハヽ元来市中保護
之守兵故恐くハ承伏可仕と奉存候へとも猶
市尹方之工夫も可有哉坐奉存候尤扶持米
之儀者上より被下置右指揮官ハ市尹方附属
之役員より相勤其他四十才以下十六歳以上
之町年寄名主用達名主家主之類ゝ帶刀非常番
兵之節免許有之右兵隊の嚮導押伍等被仰
付歩兵屯所ニおゐて一同銃刀之両術修業仕

海舟書屋

候ハヽ是又四五月を期し可也ニ候用立可申
と奉存候漢法なも民夫を派そう申候而城下
の民の内老幼を除き壮年なるものを揀
守らせ候事も有之間右兵隊を以街衢の警
衛為仕候ハヽ別段町方加役同心の巡見なも
及間敷奉存候胡亂成者ハ指揮官歩兵を令し
直ニ囚捕可致候右兵賦之負數ニ應し屯所并
晝夜警衛邏所等を伐ハ著實之工夫も有之候
間追ゝ可申上候津城下ニおゐて迫時の如
く毎ゝ乱妨人跋扈横行仕候者市尹方を始町

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

方懸り一同之恥辱ハ申迄も無之候旗本始家
人之大恥辱与奉存候畢竟ハ不恐幕府之御武
威衰弱故与實ニ大息仕候右様之乱妨人屡有
之節者縦令命無之共幕下之壮士申合巡視
(見當リ次第打果(候程之勇烈之覺悟ニ無
之而者相濟申間敷哉与奉存候さる澤ハ國持
諸侯者勿論其他諸侯之城下ニ右様之狼藉者
立入横行殺伐之儀有之節者其藩士憤発一人
も不残打果或ハ追退け不申者必然ニ可有之
欤然るよ

海舟書屋

大将軍之御城下ニおゐて傍若無人横行仕候
者を即刻打取候程之武力無之与申者如何ニ
も残念なる儀ニ而其元を責候得者上官之方々
を初め奉リ困循偷安を旨与被成候悪弊与リ
おの相成候儀与奉存候然ル故鈴与大諸侯浪
士なと幕府を奉軽視實ニ切歯仕斯様成事ニ
而者有變之節も士氣憤発之程万ニ無覚束奉
存候間務而士氣之相奮候様御周旋有之度候
士氣之衰弱を一振仕候者文武を勧めて非常
之賞罰を行ひ候ニ若くハ無御坐候前件申上

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

候農兵隊商兵隊數箇措辨及節ハ驛館尹方市
尹方計司方縣令等之屬吏引足り申間數及間
勿論右屬吏增於講武所ハ撰拳可有之儀ヲ奉
存候
第六多摩川新利根川中川大川其他河道
警備
河口之儀ハ近國陸警衛掛ニ而水塞砲臺等之
警備委曲ニ取調建築勿論ニ可有之及得とも
上游河道も左右之守備可有之事ニ及間左之
通取調申及

海舟書屋

多摩川條渡舟ハ勿論自餘之要衝之河道ニハ
必ス小堡を築き十字火を以防禦相成及様有
之度及是を間隔系と相對シ申及尤此小堡の
距離定則ハ凡三町程ニ及得とも長流之河豚
ハ右設置不容易事ニ付地理ニ應ー間遠ニ設
置及ても可也ニ防禦可相成哉と奉存及右守
兵の儀ハ府外二十里内の領より兵賦を
募り宿驛市中兵賦の如く教練為致毎堡縣令
の屬吏を指揮官とし名主其餘頭立及ともの共
を嚮導押伍ニ仕專ら大小砲を教練為致及い

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

法取締附き可申奉存候河道之儀ハ河蒸氣船
或ハゴムボートの類を迅速ニ漕り候て両岸
を攻撃ハ勿論ニ候時ハ不可防者ニ候座右間此
頃備筋急務ニ奉存候右者水柵等之手段ハ坐
候得とも神奈川近傍ニ上陸鞠子平間の邊
ニ襲来候時ハ是を拒止可致堡塞等之守備是
非共可有之候ニ存候新利根川之儀ハ御府内
隔地ニ者候申右河道を漕りニハ所ニ繁花
の部落も有之金銀米穀等焚劫奪掠の患可有
之哉ニ懸念仕候間是又可也ニ浜船を拒止ニ

へき砲臺小堡浮床臺等之設置可有之儀ニ奉
存候尤妙見嶌之邊堡塞切実咽喉之地利ニ有
之候中川條之儀も相同様之警備有之度奉存
候自餘之支流ニも要路ニハ中川邏所ニ相類
候哨堡建築有之中川邏所ハ別堡ニ御改正有
之度候又大川條之儀者御府内緊要の河道故
ニ殊更堅牢之守備有之度此河口ニ候ハ近
海御警衛掛ニ而必定嚴重之守備取調可申候
得とも右ハ兩度ニ連綿ニ砲臺連堡之類を設
置ニ中洲を増築ニ是ニ小堡を築き間近き十

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

字火を以て手強く防禦可仕要地を奉存候尤
下総邊より上陸以多し陸路侵襲之儀も萬く
無心元河脉と被聞候永代橋大橋兩國橋東橋之
四橋と堅固なる關門を設置し常平守兵を可
置要地ゟ奉存候此河豚ゟも二三箇所烽火臺
可有之候且御府内支河之河口ゟも
夫〻哨堡造立有之度候

開港許否ノ論ヨリ海防ノ事ニ渉レルモ
ノ當時諸藩主ヲ初トシテ名儒策士ノ獻

海舟書屋

言等猶數十篇アリ其中最モ關係アルモ
ノノミヲ採ル滄海遺珠ノ憾ナキ能ハス
ト雖モ此編ノ本旨ニ非レハコヽニ載セ
ス

外交ノ事漸起ルニ及テ議者東西ニ狂奔シ
和戰ノ可否ヲ論シ或ハ海防ヲ談スル者熾
ルカ如ク其已レト議ヲ異ニスル者アレハ
コレヲ賣國ノ奸ト目シ甚シキハ兄弟牆ニ
閲キ白刃ヲ弄シテ以テ快トスルニ至ル然

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

レ氏其説ノ處ハ大抵血氣ノ勇ヲ恃ミ短兵
ハ我カ長スル所ニシテ陸戦ニ至テハ彼ノ
礮艦モ無用ニ屬シ一挙シテ殲スベシト云
ニ過キス當時一二具眼ノ士頗ル外國ノ情
形ヲ審ニシ其不可ヲ論スル者無キニ非ス
ト雖氏其力微弱ニシテ治ミノ勢鋭ニ敵シ
カタク又在上者ハ多ク守舊ノ説ヲ持シ活
眼ナク狐疑因循終ニ一變シテ内亂ノ基ヲ
醸スニ至レリ要スルニ従前西洋ノ書ヲ講
シ及ヒ其機器ヲ作ルヲ禁シ以テ人民ノ耳

海舟書屋

目ヲ聾シ事ノ海外ニ渉ルモノハ毫モコレ
ヲ言フヲ得ス竊ニコレヲ説ク者アレハ皆
嚴誅ヲ免レサルヲ以テ人ミ海外ノ事情ヲ
知ルニ由ナク揣摩想像偶外人ノ来テ薪水
ヲ乞フアレハ禍心ヲ包藏シテ我國ヲ窺窺
スト ナシ上陸ヲ求ムレハ牛皮大ノ故智ヲ
襲クトナシ海ノ深淺ヲ測レハ軽侮シテ我
カ國體ヲ辱シムト ナシコレヲ疾ムコト蛇蝎
ノ如クコレヲ卑ムコト犬豕ノ如シ是皆不知
彼ノ弊ナリ又邦内ノ事ニ至テハ險要阨塞

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

兵政金穀ノ數ハ固ク秘シテ人ニ知ラシメス一朝事アルニ臨ンテ管掌ノ吏イカニ痛心疾首シ其支用ニ充シト欲スト雖モ已ニ及フ可ラス是不知已ノ弊ナリ故ヲ以テ邊防ヲ議スル者苑乎トシテ我カ實力ヲ知ル能ハス徒ニ空言ヲ吐キ空拳ヲ張ルニ不過其防備ノ要領ヲ失シ措置ノ竅繁ニ中ラサルモ亦宜ヘナリ於是上下相容レス内相軋轢シ議論皆矛盾スルニ至ル是其積弊ノ馴致スル所ト雖モ就中隱秘ノ害其源ヲ成ス者ト謂フ可シ

海舟書屋

国立国会図書館 勝海舟関係文書 2-17

海舟書屋

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17

国立国会図書館　勝海舟関係文書 2-17